

趣旨説明

谷 美奈
帝塚山大学

帝塚山大学の谷と申します。本日はお集まりいただき、ありがとうございます。大会企画フォーラムの趣旨をご説明いたします。このフォーラムでは、今年の初年次教育学会第7回大会のメインテーマである「初年次教育における自己表現」について、いわゆるアカデミズムのメインストリームからは一線を画するような教育実践を通して検討します。具体的には〈造形〉〈演劇〉〈文章〉という三つの事例から、初年次教育における新たな表現教育の可能性を考えたいと思います。

初年次教育において自己表現はコミュニケーションの第一歩であり、大切な教育です。ただ、大学全体を見回すと、数学的、科学的な概念や方法をメインとした教育・評価が行われていることが多いのではないのでしょうか。そして、それらがア・プリオリな前提と化していることを、大学やその教員はどれだけ自覚しているのでしょうか。

初年次教育においては、学生一人ひとりの個性に対応したカリキュラムや支援手法がとりわけ大切になると思います。それを開発する可能性を広げられる教育のあり方について考えるために、欧米の三人の研究者の見解をご紹介します。

まず、アメリカの認知心理学者ハワード・ガードナーは、次のように述べています。人間の知性には少なくとも8種類あり、どの種類が強いか、あるいは弱いかは人それぞれ違う。人によって知性が異なるからこそ、数学的・科学的な教育に偏らず、芸術的な教育にも力を入れる必要がある、と。次に、イギリスの教育学者ケン・ロビンソンは、学校教育が狭い領域でしか子どもの能力を見ようとしないと指摘し、子どものクリエイティビティーを損ねていると警鐘を鳴らしています。そして、数学的、科学的思考を高めるための教育と同じように、芸術的感性や人文的教養を養うための教育や身体の健全な発達を促すための教育にも力を入れるべきであると強調しています。また、アメリカの教育学者キャシー・デビットソンは、次のような衝撃的な予測をしています。2011年に小学校に入学した子どもの65%は、大学卒業後、2011年現在存在していない職業に就くだろう、と。

この三人の見解に触れても、もっとクリエイティビティーを大切にしたい教育を行う必要性を感じるのではないのでしょうか。さらに、今後は社会が急速に変わっていくと考えられますから、変化に翻弄されないように、物事の本質を見極める力を養う教育も必要になるでしょう。そのためには、妥当な広がりを持つバランスのとれたカリキュラムと、人間知性による豊かで可塑性に富む表現を正當に評価する教育方法や評価の仕方を確立することが欠かせないと考えられます。

数学的、科学的思考だけでなく、もっと広い角度から初年次教育のあり方を検討しようと、このフォーラムでは初年次教育における新しい自己表現教育について皆様と一緒に模索したいと考えています。なにとぞよろしくお願い申し上げます。

2014年度初年次教育学会第7回大会・大会企画フォーラム



自己表現：表現から実現へ

<造形> <演劇> <文章>

企画/趣旨説明：谷 美奈 (たに みな) 帝塚山大学

1



自己を表現することはコミュニケーションの第一歩です。そして、大学における「自己表現」教育は、例外はあるものもつばら数理的科学に依拠した概念や方法が主流となっているのではないのでしょうか？このことは当然、評価方法にも反映しているでしょう。

SO YOU THINK YOU CAN

しかし、それらがなかばア・プリオリな前提と化していることに、大学や教員はどれだけ自覚的でしょうか？とりわけ初年次教育の分野では、学生一人一人の個性に対応したカリキュラムや支援手法の開発の可能性を狭めていないでしょうか？

2

■ ハワード・ガードナー 「多重知能 (Multiple Intelligences=MI)の理論」
「知能は単一ではなく、複数ある」「人間は誰しも複数(現在は8つ)の知能を持っている。」
長所やプロフィールが個人によって違うように、人によってある知能が強かったり、ある知能が弱かったりする。
STEM+ARTの教育がこれからは大切だ。

■ ケン・ロビンソン 「学校教育は子供の創造性を殺してしまっている」
学校は、ごく狭い範囲の領域でしか子供の能力を見ようとしないう。STEM分野すなわち 科学や数学は必要には違いない。ですがそれで十分ではありません。
教育は 芸術 人文 体育にも 同様に重きを置くべきです。

■ キャシー・デビッドソン 「2027年、アメリカ人の65%は今までになかった新たな職業に就職する」
「2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう。」

3



妥当な広がりをもつバランスのとれたカリキュラムと、人間知性による豊かで可塑性に富む表現を正当に評価する教育方法は、たえず前提を疑うことによって編み出されるものと信じます。

初年次教育における新しい表現教育の可能性を皆様と模索したいと考えます。

4